

主題 今こそ考える、保育実践の充実につながる振り返りの工夫

指導助言者 川崎徳子 先生 山口大学教育学部 准教授
司会者 藤津和恵 認定こども園野田学園幼稚園
発表者 豊田雪乃 認定こども園野田学園幼稚園
記録者 内富里美 認定こども園阿知須幼稚園

研究の概要

(1) 認定こども園野田学園幼稚園の概要

創立67年

中学・高等学校があり、学園の施設や人材を活用した保育を行っている

平成27年、山口市内初の幼稚園型認定こども園として認可

平成29年「のだぐえんようちえん0・1・2」を新設

乳児部 担当制保育、幼児部 4・5歳児混合保育

【教育目標】「みんな なかよく やりぬこう」

【本園の合言葉】

「子どもも保育者もわくわくする幼稚園になろう」

【園児数】

(乳児部)

0歳児…7名 3歳児…94名

1歳児…24名 4歳児…104名

2歳児…30名 5歳児…105名

(2) 主題設定理由

平成29年改訂の幼稚園教育要領では、乳幼児期に育みたい資質・能力の3つの柱を、遊びを通した総合的な指導の中で一体的に育むことが示された。そこで、子どもたちが「やりたい!」「知りたい!」「関わりたい!」という思いに突き動かされ、主体的・対話的で深い学びに繋がっていくように保育改革を進めている。昨年度は、子どもの遊びが充実するための環境づくりをテーマに取り組んだ。教師主導型の一斉保育から脱却し、子どもたちがやりたい遊びを支えるよう遊びを楽しむ時間を十分に保障したり、興味・関心・季節に応じて保育室の環境を柔軟に変化させたりしたことで、遊びに自発性と継続性を生み出した。子どもの遊びを支えるためには、保育者が子ども一人ひとりを理解する力と保育者間で子どもの育ちを共有することが大切である。そこで、2年目は、保育室だけでなく園庭環境も改善したい、子ども理解を深め、適切な援助の在り方を考えたいと思い、今年度の研究は、「保育実践の充実につながる振り返りの工夫」をテーマとし、ミーティングや記録を通して、保育者同士が子どもや保育について語り、子ども理解を深め、保育力の向上を目指そうと考えた。

《事例1》語り合うミーティングにするために

① ミーティングの持ち方

以前は15時半頃から、職員室で園務や日誌の記入などを行っていた。17時以降に終礼をはじめ、要点が絞れず長引き負担となっていた。今年度からは、休憩室を設け、オンオフを分け、気持ちをリセットして仕事に臨めるようになった。

乳児部は昼寝の時間を、幼児部は保育終了後から勤務時間終了までの2時間半を整理し、ミーティングや記録記入の時間を曜日ごとに決めて割り振った。1週間のスケジュールを組み、ミーティングの内容によって15分・30分と時間を決めて集中的に取り組むことで、時間捻出と負担の軽減に努めた。

② 種類と内容

こどもミーティング	日々の子どもの姿や自分の保育について
学年主任ミーティング	行事や園務、各学年の育ちについて
乳児・幼児主任ミーティング	乳児部・幼児部の育ちの共有や園内の環境構成について
全体ミーティング	子どもの姿の共有、園行事の確認について
資質向上ミーティング	定期的に講師を招き、自園の保育を評価し、全職員で学ぶ
カリキュラムミーティング	来年度に向けての教育・保育の方針を探る、指導計画の見直し

何を話し合うかが事前に決まっていることで、効率的に準備でき、議論が深まってきている。

「こどもミーティング」は、子どもについて、年齢別、異年齢、全員と様々なメンバーで集まり、毎日話をしている。週末には、乳児部、幼児部全員でミーティングを行っている。

③ 記録のとり方

マップ型記録（保育環境に位置付けて、あそびや人間関係を記述し、空間を俯瞰的に捉え記録）

エピソード記録（印象に残った場面をもとに、子どもの思いや遊びの中での育ち、今後の見通しを記述）

子どもの理解や今後の援助については、色を付けることで見返ししやすい工夫をし、指導計画とも照らし合わせて確認している。

「こどもミーティング」では、子どもの様子や面白かった場面など、エピソードから話題を広げ、肯定的に受け止めるようにしている。当初は、意見が出しづらかったが、狭い場所で行うことがあり、保育者同士の距離が近いと和気あいあいとした雰囲気を作ると気づき、場所や形態を変えて行っている。ミーティングを積み重ねていく中で子どもの姿や保育の振り返りの視点がわかり、保育者が子ども理解や援助の幅を広げられるようになった。

《事例2》 ミーティングでの振り返りを生かす（園庭環境の見直し）

ステップ1 子どもたちの姿を捉える

子どものつぶやき・思い・様子と時系列での記録をマップ型記録に記述した。

問題点

- ・いろいろな遊びが混在し、遊びを妨害されたり、玩具が散らかったりしている
- ・乳児が遊んでいるところに幼児が加わると勢いに圧倒され不満を感じている
- ・暑さを回避できる場所を選んでいく
- ・時間の経過とともに子どもの遊びや動線が変化している

ステップ2 環境の再構成

遊びの混在を解消するために

玩具の配置付近に遊びが集中しており、それが遊びの混在を引き起こしていると考えた。玩具は、種類ごとに分けて入れ、玩具倉庫前に出していたが、スコップやカップは砂場の近くに、ジョウロやバケツは水道の近くに置くなど、種類ごとに置き場を見直した。さらに、子どもたちの動きに合わせて玩具の置き場を移動した。すると、子どもたちの遊ぶ範囲が広がり、それぞれの遊びを思いきり楽しめるようになった。また、子どもたちの願いに応じ、適した道具も準備するようになった。

（例）泥団子づくりで子どもたちが細かい粒子の砂を集める姿を見て、目の細かい調理器具のふるいを用意
乳児が安心できるスペースを確保するために

幼児が園庭に加わると、乳児は乳児施設側に寄ったり保育者の周りに集まったりする。そこで、お父さんボランティアの協力により見通しが悪かった汽車の大型遊具を移動させ、その空いたスペースに低年齢用の砂場玩具を置くことで、乳児と幼児の遊び場が整理され、乳児がゆったりと遊べるようになった。

陽射しを回避し遊びを楽しめるように

4・5歳児は、シェードの下など日陰へ移動し、遊びを中断する姿が見られた。そこで、太陽の動きに合わせて、1日に数回、テントを移動させた。暑さや日差しの影響を受けず、遊べるようになった。また、栗の木公園

の犬のベンチは、幼児が遊ばないため、乳児の過ごすアンパンマン公園に移動した。どの年齢の子どもにとっても遊びやすく、「やりたい」が満たされる空間へと変わっていつている。

ステップ3 子どもの遊びを支えるために

犬のベンチがあった場所に、隠れ家のようなテントを作ったが、4・5歳児が興味を示さず撤去した。すると、デイキャンプを終えた子どもたちが、その場所に“かまど”を作って遊び始めた。必要なものを園庭から探し、「本物に近づくように」と遊びを進めていく姿に、子どもたちの「やりたい」より保育者の「させたい」が強かったと気づき、反省した。

子ども主体の遊びだからこそ、継続し、協働し、楽しむことで学びが深まる。指導計画の願いの押し付けでなく、保育者は遊びを支えることが大切である。

《事例3》 それぞれの子どもの姿の記録を生かす

アリ探しが始まり、園庭を探し回るが見つからず、砂糖水をまいて待つが場所が豪雨でわからなくなる。再度挑戦することになり、【少人数のグループでアリの巣を探し、そこに仕掛けを作って捕獲する】という策が生まれ、卵パックで作ったアリホイホイなどの仕掛けを作り、“アリを捕まえよう大会”を開催する。

保育者は子どもたちの姿を記録に起こすことで、子どもの遊びだけでなく、動きを視覚的に把握でき、一人ひとりの思いや友だちとの関係性も見えてきて、次への課題と遊びの予測ができた。

5月頃、同学園の中学高等学校内図書館の幼児用コーナーの図鑑でアリの生態を調べ、新たなことに関心を持ち始めた。司書から博物館で開催中の「危険生物展」のパンフレットをもらい、そこにヒアリの標本があると知り、「どうしても行きたい」という子どもたちの願いをかなえるため、片道1時間かけて園バスで出かけた。猛毒を持つヒアリが、3ミリの小ささで危険生物であることを知り、大きさだけで危険度は判断できないと感じていた。ヒアリは外来生物であることを知り、日本に入り込まない方法を考え、調べている。

アリの巣を見るために、透明容器でア리를飼育することになり、アリの生態への関心が高まり、探求心が強くなった。そこで、生物学の高校教師と連携し、遊びの質を高めようと考えた、高校生物教室で実態顕微鏡を使い、アリの毛が生えている様子を確認して興奮していた。

アリ探しをきっかけに、生態に関心を持ち、友だちと一緒に調べたり、博物館のスタッフや生物教師に教えてもらったりする中で、様々な人との関わりを持つことができた。アリについて詳しく知り、子どもたちにとって身近な生き物となったことで、餌を運んでいるア리를そっと見守るなど、思いやりが芽生えた。そして、新しい知識を得ることの喜びや、知ったことを生活の中で生かすことの楽しさは、子どもたちの好奇心・探求心をより高めることにつながり、“学びに向かう力”を育めた。

(まとめ)

子どもの姿やつぶやきを具体的に記録し、興味関心を持っていることを探ってきた。また、その記録を見返すことで、子どもの姿の変化に気づき、次なる遊びの予測と援助の在り方を見出すことができた。この事例から、子どもたちの思いと保育者の適した援助が合致してこそ、遊びは継続し、主体的対話的で深い学びと豊かな体験を得ることができるとわかり、記録の大切さを実感した。

《まとめと今後の課題》

当初は、自分のクラスの業務を優先したい気持ちが強く、ミーティングは「早く終わってほしい」と感じたり、記録は「何をどう書けばよいかわからない」と悩んだりした。ミーティングや記録を重ねていく中で、少しずつ書き方や振り返りの視点がわかるようになり、子どもの経験していることや内面の育ち、課題が見えてきた。しかし、保育者の思いが前面に出て、うまくいかず迷ったり、落ち込んだりしたが、あきらめずに取り組み続けられたのは、“子どもたちのために”という気持ちを保育者一人ひとりが強く持っていたからである。子どもたちの姿に変化がみられるようになってきた今こそ、【子どもの姿を捉え、振り返り、実践を行う】小さなサイクルの積み重ねを大切にしていけることが、さらなる保育力の向上につながっていくと確信している。この土台をしっかりと固めていき、指導計画へ位置付けたうえで、今後は教育課程を見直していくことが目標である。

質疑応答

Q：マップ型記録は、興味深くやってみたくと思った。

各学年色別にシールを貼って子どもたちの立ち位置を表していたが、子どもたちが自主的に活動で遊んでいる場面で保育者がチェックをしていたのか？いつ、どういうタイミングでやっているのか？

クラスや学年があるので先生たちが連携してやっているのか？見守っているときに先生がどのようなスタンスで見守り、どのようなタイミングで適切な援助をしているのか？

A：チェックは、子どもたちが遊んでいる姿を見守りつつ、自分の頭の中に置き、その日のミーティングの時にシールを貼ったり、書き込みをしたりと、毎日のミーティングでマップ型記録を書くようにしている。学年ごとに園庭に出る時間が違うので、それぞれの学年の担任が、その場で「3歳はこのようにしていたよ」、「4・5歳児はこうしていたよ」と記入するようにしている。適切な援助のタイミングは、遊びによって計っている。子どもたちの遊びがより充実し、子どもたちの思いに応じた準備物ができるように遊びの中の会話に耳を傾け、遊びを見守ってタイミングを計りながら、適切な援助ができるようにしている。

Q：振り返りを毎日、全員で共有しながらやっていくことが大事であるということが、山口市内の研究会でも言われているが、ミーティングを工夫されていたのがわかった。こどもミーティングは、先生が今日の保育を振り返る時間と考えてよいと思うが、降園時間に当たる時間なので、忙しい時間に少人数でできる先生が集まってやっているのか？1日2回もどのようにしてやっているのか？

A：乳児部は乳児部の担当が午睡の時間に、幼児部は幼児部の担当の先生が幼児の降園後に行っている。

学年別、乳幼児全員など、日ごとに形態を変えながらミーティングを行っている。

Q：野田学園幼稚園は、先生が何人ですか？

A：65人です。

Q：明るく前向きな先生がたくさんおられ、子どもも先生もこの研究を引き受け良い経験、勉強になったと思う。

これが続くとよいと思う。研究資料の1ページ1ページに苦勞が出ている。今度見学させてもらいたい。

グループ討議及び発表

グループ内で自己紹介と各園の園庭でのエピソードについて話し、記録者が、用意された紙に記録。

記録をもとに振り返りを行う。子どもの理解に線を引き、それをもとに今後の援助について話し合う。

G グループ

(子ども理解) → (今後の援助)

乳児部 ボディペインティングを →子どもが少しでも興味があることを保育者がと見極め嫌がる子がいた。 苦手なことにも少しずつ一緒に楽しく取り組みたい。

ジョウロの持ち方がわからず、 →少し待つと、両手で持って工夫する姿が見られた。

水やりがうまくできない子がいた。 できることから少しずつステップを踏んで成長できるようにする

4歳児 虫に興味を持っている男の子たちが →室内に図鑑で調べられるコーナーを作る。

自然マップを使うことで花にも 子ども発信の遊びが展開していくよう援助、興味を持つようになった きっかけづくりをする。

5歳児 室内遊びにしか興味を持てなかった →おにあそびや体を動かすことや運動会に

幼児たちがクラス活動で体を つながるものを取り入れることで。

動かすことを楽しんだ 自らやってみたくという環境を取り入れたい

B グループ

大きな井戸を作ったが、一人では動かせない →子ども理解を深めながら、どのように援助するか井戸を二人で援助しながら遊びこんでいた 話し合うことが必要

特別支援の子どもがパニックになる→支持は短く行う。「だめ」ではなく、「～するよ。～しましょうね」
「廊下は走りません」ではなく、「廊下は歩きましょう」と
言葉をかえると、スムーズに会話が生まれた。

F グループ

2 歳児 4 月は自由な子が多く、話を聞かず、→友達との関係ができる
信頼関係ができていなかった。 応答的な支援の充実
日々、過ごす中できっかけがあり、 0 1 2 歳児で経験すること、クリアする課題を
自分の担任と認識、信頼関係ができた 1 学期を振り返り、2 学期につなげていく。



川崎徳子先生による指導助言

先生方が、各グループでたくさんの子どもの姿を語られ、日々の生活、保育を子どもと一緒に紡いでいくために、見る力を鍛えていったり、語りながら新しい情報を得たり、自分を振り返ったりと、自分の保育を見つめ直すきっかけになったと思う。

(映像を見て) 立派な砂場もあるが、あえて、そこ(ウサギ小屋の裏)に行き泥団子の泥を見つけている。道具を使い、自分だけでじっくり作ったり、友だちと語り合ったりする時間もある。泥団子を作るだけでなく、全身で世界と対話しながら全身の感覚の中で体も体の中身も心も育ち、認知的なものも含め、資質能力(学力)を支える様々な体ができいく過程が1番育っていく時期が乳幼児期である。ここで何が育っているかをとらえる視点や園の環境をいかに子どもにとって必要な環境としてデザインしていけるかが大切である。

一人ひとりの子どもが今をどう生きているかを、子どもの表情や思いを理解して、育ちの可能性まで感じていく。そのためには、その姿から自分の体験・経験を振り返りながら求めていく。振り返りは子ども理解である。

泥団子づくりで一人ひとりが何を体験しているかは違う。そこでどう過ごして、何を体験し、何を感じたか、どのように学ぶかが重要である。学童期以降は、アクティブラーニングという言葉になっているが、子どもにとってはそれが“遊ぶ”ということである。“遊ぶ”ということが子どもの成長に大事で、遊びこむということがどういうことなのか、その環境をどう作っていくかが大事になってくる。「どのように学ぶか」の部分が、保育の中では「どのように遊ぶ生活をしているか」と問われている。今日の資料で発表園の先生が、「育みたい10の姿」ではなく、「育てほしい10の姿」だったと気づき、訂正された。言葉の使い方で保育者がどういう視点を持っているかが分かる。子どもに育てていくべきものは3つの柱だが、育ててほしいのは10の姿である。

新しい教育要領の中で何を知っているか、何ができるかだけでなく、それを支える非認知的能力、遊びを「何をやるか」ではなく、「どう育っているか」を捉える私たちの視点がとても大事になる。資質・能力を支えているのは、心と体の中の構造や機能まで総合的な育ちである。

日々の保育は、5領域の中の生活がバランスよくあるかを指導計画やカリキュラムで作っていく。

育っていく姿が子どもにはどう表れているかが「幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿」に今回示された。これを手掛かりにして、この姿は、自分たちの保育の中に乳児から5歳まで、その時期の子どもの姿として表れているだろうか自分たちの保育を振り返るもので、到達目標ではない。

5歳児の泥団子づくりの場面に10の姿の思考力の芽生えが表れている。例えば、「感受性」では、泥団子ができると思える感覚を、いろんな砂を触ったり、友だちと遊ぶ中で感じたりする。受け身ではなく、「こうしたい」と思わず意志が出てしまう。これが幼児期には大事で意志が生まれる生活をどう作っていくかが育ちを支える。思考力の芽生えは、時には子どもが保育者と一緒に考えながら、遊びの中で自分がやりたいと思ったことに向き合っていく中で育っていく。やってみて自信が持てるようになる。1つの遊びがいくつもの姿につながっているので、それが十分できる環境を保障する。10の姿が、園の大事にしたい、考えていきたいことを振り返る手掛かりとなる。幼小連携で小学校の先生にも伝えていく。

(映像をみて) 乳児の部屋をのぞきに行く3歳の子たちが“アンパンマンの歌を歌う気持ちよさ”、“歌えるようになった自分”を表現したいのが前面に現れている。5月頃は、前にいた部屋や前の先生に会いに行きたい時期である。子どもなりに育っていると実感しながら過ごしていると、それを受け止めてくれる先生がいる。こういう体も心も全身で育っているところから3・4・5の育ちがあることも捉えられる。発表園はこども園で、乳児からの生活がつながっていて、今のその姿があるという子どもの育ちを、園の中で先生たちが共有している。

今回の教育要領にも、乳児と1歳~3歳未満の狙いと内容が厚くされ、記述が加えられ、保育における大切な原理原則として位置付けられている。乳児の保育も幼児期も小学校以降の生活となっていく。忘れてはならないのは、心も体も全身が育っているということ。それを支えていくためにカリキュラム、指導計画、教育課程がある。幼小連携の中でも、小学校で席につき鉛筆を持って勉強ができるのも、45分座れる体力があるか、体のバランスが整っていて背中を支えられるかである。それは、座る練習ではなく、日々の中でしっかり遊びこんでいる、体を使っているということである。国際教育が注目され、小学校から英語が入ってくるが、英語の先生が、国語力が必要と言っている。自分で考えて、言葉を扱って、いろんな経験を言葉にすることが大事である。そういう生活が乳児期から始まっていて、総合的な生活をどう考えるかが保育の課題だろう。

子どもを見取することは教育の評価につながる。評価というと、一般的にはランク付けになるが、教育の中では、子どもに対する評価、子ども理解による評価、「なぜそんな行為をしているのか」「どんな経験をしているか」「どんな育ちがあるか」を子どもの姿から理解していく。子どもの姿を通して、「この実践はどうだったか」「今の環境はどうだったか」を考えていく。この2つの側面での子ども理解からの評価が大きい。どう見ていくかが保育者の専門性であり、教育実践が進んでいくためには子ども理解が中心にある。子どもに返ししながら子どもの姿で子どもの育ちを支えていく意識を保育者が持つことが大事である。

発表園の先生が力を入れられた「振り返り」のためには、記録し、それを見つめる時間をとることが新しい教育要領の中にも示されている。ノンコンタクトタイムの確保といわれており、それも必要な業務として入れていく。毎日みんなで顔を合わせるとか、自分と向き合うことは大事で、園のやり方を工夫することが今後の課題である。子どもの遊びの生活を振り返って記録する。今日心に残ったことをメモするだけでも良い。そして、カンファレンスやミーティングを通して、みんなで振り返ることが大事である。マップ型記録(遊びの環境図)で、今日の遊びがどうだったかを全体で振り返るには、園でどう生活しているのかを捉えてみる。どこでどう過ごしているか、だれがどう過ごしているか、環境をどう生かしているか・作っているか、園庭がどう使われているかが見え、子どもがどこで何をしているかを振り返ることができる。最初は書けない。一人で書こうとすると見えない。繰り返したり、いろんな先生たちと行ったりすると語る時間ができる。出来上がる過程の中で保育を見つめ、振り返る時間が持てることにマップ型を使う意味がある。子ども一人ひとりの今日のストーリーを思い出してみる。見えてこない子は、時々名簿を活用すると、その子の興味関心と発達の姿・課題が見えてくる。年度末の指導要録の資料にもなる。

総合的な育ちを捉えるには、エピソード記録が大事になる。保育を文字に表現すると、その時には気づけなかった子どもの育ち・状況・発達の過程が見えてくる。語るのも、エピソードを振り返るのも同時に必要である。振り返りに時間を工夫して取るのが保育の課題である。

環境を通して行うのが保育の基本である。幼児はこの時期、環境に対して応答的に向き合いながら、自分の関わ

り方を築いて取り込んで、幼児期における見方・考え方、いわゆるその後の資質能力につながる力が育っていく。教育要領の中の総則の幼稚園教育の基本「環境を通して行うものである」のところに、【**幼児とともにより良い発達に必要な教育環境を創造するように努めるものとする**】とある。この言葉が大事で、教育環境を幼児と創造する、これが保育をつくっていく環境構成になる。遊びが深い学び、対話的主体的学びになるように環境を通して行う。環境が、子どもの中でどうつながるか、どう生かされるかが大事である。思わず関わりたくなるような環境、必要な意図的な環境を再構成していく。

今のカリキュラムを今の子どもの生活を振り返ることから見つめ直してみる作業を子ども理解から進めていくのが大事である。具体的な子どもの姿をいかに感じ取れるかが、日々の保育にも振り返りにもつながり、次への展開にも生かしていけるものになる。

一人ひとりの、今、ここの育ちをどう見とるかによって、その時期の発達の過程を捉えたり、発達の特性が理解できたり、それが教育課程の再編成につながっていく。

正規や補助の先生が、それぞれの立場で振り返ることによって、自分の保育観やこども観を含めて捉える意味を豊かに広げ、保育を考える思考を鍛えていけるのが、保育者としての資質能力を上げていく上で大切である。

振り返りにもいろいろな方法があるが、津森誠の言葉で「子どもの行為の理解には、最終的正答はありえないのであって、日々の積み重ねの中で、常に新たな状況において問い直されてゆく。原因と結果の定式を作ったときに、子どもの行為は主体的人間を離れて、対象物となってしまう。常に問うもの自身が主体的に生きる現実の状況に立ち戻って考えることを要する。」とある。

保育を振り返るといことは、保育者として保育の実践の中でどう生きるかを問い直す作業である。日々、保育者自身がどう向き合っていくかを子どもとともに作っていくのが保育実践である。見つめ続ける姿勢が大事で、それを支えるのが振り返りであり、それを継続していくために、それぞれの園で無理のない振り返り・記録の仕方をしていくことが大切である。